OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	職業教育と能力/技能形成に関する教育社会学的研究 : 工業高校から中小製造業への移行を事例に
Author(s)	片山, 悠樹
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58493
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【12】

氏名	片山悠樹（かたやまゆうき）
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第　24300　号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	職業教育と能力/技能形成に関する教育社会学的研究―工業高校から中小製造業への移行を事例に―
論文審査委員	（主査） 教授　平沢　安政 （副査） 教授　木村　涼子　　教授　近藤　博之　　准教授　中村　高康

論文内容の要旨

本研究の目的は、製造業に対する工業教育のインパクトの解明である。具体的な分析設計としては、中小企業の製造業にとって有能な人材を工業高校がいかに形成／供給しているのか、そのメカニズムの解明に焦点をあてた。

こうした課題にこたえるため、人的資本論、対応理論や葛藤理論など教育システムと職業／経済システムに関する諸理論を＜教育－能力－職業＞の観点から整理し、カリキュラム／教育内容にもとづいた能力に対する自己認識（＝能力アイデンティティ）の分化に着目する必要性を提起した。そのうえで、カリキュラム／教育内容による差異的な社会化＝所定の能力アイデンティティの獲得という本研究の分析視点を、イギリスの教育社会学者Bernsteinの理論を援用しながら設定した。工業高校が構築する能力アイデンティティは独特な性質を帯びているのか、そうした能力アイデンティティが製造業（中小企業）の技能形成にとって有効な基盤となりうるのか、このことを実証した。

主な知見は、次の通りである。

・工業高校と製造業（中小企業）の制度的リンケージ（＝「学校経由」による移行）の拡大／維持
・「ものづくり」の受容／解釈を通じた工業教育の専門性の再構築
・専門科目（＝工業科目）に対する認識と、専門科目を基調とした自己選抜の存在
・工業教育にとって「望ましい」能力アイデンティティの獲得＝社会化と、専門科目の影響
・中小企業の製造業（直接生産労働者）の技能形成に対する工業高校出身者の優位性と限定性

これらの知見を踏まえると、中小企業の製造業に対する工業高校の効果は、次のように解釈できる。

1960年代以降、人材供給の観点からみると、工業高校は中小企業の製造業との制度的関係を拡大／維持しており、人材を安定的に送り出す機関として機能している。一方、教育内容に目を向けると、工業高校はかつて保持していた専門性（＝科学性や理論性）をいったんは喪失したものの、1990年代以降「ものづくり」をキーワードに専門性が再構築されている。そして、新たな専門性のもと、工業高校の生徒たちは専門科目を「正当な」／「価値ある」知識とみなし、専門科目を準拠枠として職業選択と自己有能感（＝能力アイデンティティ）を形成する。一般的にいえば、入試制度のもと、中等教育レベルの知識の序列関係は主要5教科が「教科のヒエラルキー」のうえで高い位置を占めるのだが、工業高校では工業関連の知識に正当性が付与され、生徒たちはそれを基準に能力の自己規定を獲得しているのである。抽出された能力アイデンティティ（＝「加工・設計」能力アイデンティティ）は工業高校独自の教育作用の賜物であるといえよう。しかも、その能力アイデンティティは、製造業（中小企業）の生産労働者に欠かせない技能の一部をスムーズに獲得する基盤となっている。このことから、工業高校は人材の量的な供給にとどまらず、中小企業の製造業にとって優れた労働力を形成する機能を内蔵していると解釈できる。その意味で、本研究の仮説は支持されたといえる。また、本研究では工業高校－中小企業の製造業という、教育システム－職業／経済システムの「ローカル」な関連を取り上げてきたが、うえの知見をみる限り、職業教育は職業／経済システムに対して有効性を発揮していると理解できる。

以上の議論から、まず①教育システムが生み出す能力の多元性に関する理論的な視座を提出した。教育と能力の間には多様な結びつきが存在しており、カリキュラム／教育内容は媒介的な役割をはたしている可能性が考えられる。次に②職業教育の限定的効果について提起した。工業高校と中小企業の製造業という限定された関連を取り上げてきたが、職業教育の効果の範囲を検討するうえで恰好な対象であった。こうした分析戦略を設定しなければ、工業教育（職業教育）の効果は把握できなかったといえる。職業教育の効果を研究する際、限定された範囲を扱うことが必要であろう。そうでなければ、その有効性を看過してしまう可能性がある。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本の中小製造業の発展に工業高校が重要な役割を果たしてきた事実とともに、工業高校の内部に優れた人材を生み出すどのようなメカニズムやプロセスが存在しているのかを理論的、実証的に明らかにしようとするものである。

工業高校における教育は、ただ知識や技術を提供するだけではなく、特定領域の能力に対する生徒の自己認識、つまり能力アイデンティティを育てているのではないかという観点から、申請者は工業教育が育てる能力アイデンティティについて、インタビュー調査やパネルデータを用いた因子分析など、多面的な考察を行っている。申請者は能力アイデンティティを「加工・設計」能力アイデンティティと「販売・事務処理」能力アイデンティティの２つに分類し、工業高校の生徒にとって「加工・設計」能力アイデンティティが望ましいものであること、さらに専門科目の成績がこのアイデンティティにプラスの効果をもつことを明らかにしている。近年、能力概念が「意欲」「態度」「振る舞い」など心理的・行動的次元にまで拡張され、非認知的な能力として論じられる傾向が広がっている中で、申請者は能力形成における階層的影響を考慮しながら、だれにでも習得可能な定型化された認知的能力の獲得にあらためて焦点を定め、工業教育によって形成される生徒たちの認知的能力アイデンティティに着目した議論を展開している。

論文構成の全体を見ても、人的資本論をはじめ、選抜と社会化等をめぐる主要な教育社会学的理論が包括的にレビューされており、とくにデュルケムの「社会装置としてのカリキュラム」論やバーンステインの教育コード論および相対的自律性概念を援用しながら、工業高校の教員が独自の専門性をつくりだし、工業高校特有の能力形成装置としてのカリキュラムを維持・継承してきたプロセスを考察している点にはオリジナリティがあり、高く評価できる。理論的な分析枠組みと調査データにもとづく実証的かつていねいな議論が、バランスのとれた形で構成されているといえるだろう。

他方で、申請者は本研究の課題についても冷静に認識している。まず、工業高校は工業教育を実施しているさまざまな教育段階の一部でしかなく、工業教育が形成する独自の能力アイデンティティを検証するうえで限界をもっていること、第二に工業教育以外の職業教育（商業や農業等）との比較分析が必要であること、そして第三にジェンダーや社会階層の視点をふまえた分析が今後必要であることなどである。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。